

# 岸田國士の大政翼賛会文化部長就任をめぐる言説

松本和也

## I

第二次近衛内閣のもとで展開されてきた新体制運動の一つの帰結として、その位置づけについて疑義を被りながらも大政翼賛会が結成され、一九四〇年一月二日には発会式を迎えた<sup>1)</sup>。

政治史的な議論・評価とは別に、大政翼賛会が文学領域およびそこに属する文学者にとっても大きな意味をもつたのは、それが昭和一〇年代後半における文化統制に関わるものに映じたからだろう。事実、《嘗て、太平洋戦争中、大政翼賛会の文化部長に就任した際、我々文学者はこそぞつて同君〔岸田〕を声援した》という豊島與志雄は、《その明徹な理智を以て、軍部の横暴に対する一つの防波堤となるべきを期待した》と当時を回想している<sup>2)</sup>。

初代大政翼賛会文化部長のポストには岸田國士が就くが、ここではそのことをめぐる評価を三つ確認しておこう。安田武は、《岸田は、翼賛会「文化」部長という立場を利用し、東亜の指導民族たる日本人の自覚という、「時局」的な発想を逆手にとり、この

二つの足場を足がかりとしながら、現代日本の「風俗」の壊乱と猥雑とを、批判しつつける》のだとその言動をまとめた上で、それが《岸田にとつて、かねてからの主張であり、主題であった》ことを補足しながら、次のように評価している。

大政翼賛会文化部長岸田國士の主張は、当時の狂熱的な時流のなかにあつて、穩かであり冷静であり、時局便乗の口吻は微塵もない。『文藝』追悼号には、昭和十八年に書かれた「力としての文化」の一部（青年の夢と憂鬱）が、一字の訂正も加えられず転載されているが、それは、戦後の昭和二十九年にもそのまま通用するようなものである。岸田の「発言」について見るかぎり、太平洋戦争下といえど、彼は「変節」どころか、「年来の持説」を固持して譲つてはいない<sup>3)</sup>。

もう一つ、都築久義による次の論評も比較のため引いておく。岸田國士の文化部長在任の一年八ヶ月は、たしかに政府当局の介入も内務省情報局による「弱体化」もほとんどなく、大政翼賛会文化部はその創意によつてさまざまな文化運動を展開した。しかし、文学や文化政策に対する根本理念は、時

の政府や情報局と一致していたことは見落してはなるまい。<sup>(4)</sup>

いずれも、岸田の文化部長としての仕事に一定以上の評価をした上で、安田は時局に流されなかつた岸田の一貫性を評価し、都築はしかしそれが国策ともシンクロしていたことを指摘する。あるいは、『三木（清）、岸田、中島（健蔵）らによって推進された新体制運動は、三四年以前の無産運動、三四年から三七年にかけての散発的な人民戦線の動きにつづいて、ファシズムにたいする第三の、そして最後の抵抗線をかたちづくつた』と捉える渡邊一民は、『大政翼賛会』文化部長岸田國士は、知識人が直接政治に参画することにより現実変革を目指した、この第三の抵抗線を象徴する存在<sup>(5)</sup>なのだと位置づけており、見方は多様である。

むしろ研究史においては、文化部長として岸田が擁立・決定されていく経緯についての議論が蓄積されてきた。関係者の回想等を総合的に検討した奥出健は、次のような推測を示している。

昭和十五年九月末日から、近衛—山本ラインによつて岸田擁立が始まつた。そしてこの岸田文化部長誕生を確実にするために実質的には後藤隆之助—三木清のラインが骨を折つた、というのが私の推測である。<sup>(6)</sup>

いずれにしても、岸田を擁立すべく運動した人々がいて、そうした光景は当時、『岸田氏を翼賛会文化部長の椅子に送つた知性派は、その理想主義をかかげて、知識人たちの絶大な支持を得る』（日比野士朗「戦争と日本文学」、『国民文学の構想』聖紀書房、昭17、156〜157頁）といった具合に映じていたようだ。文字通り、岸田が時の人として、文学関係者の期待を一身に集めていた様相が彷彿とするが、他方で、当手を振り返る関係者の口吻は、一様

に暗い。まずは、戦時下の雰囲気と当事者間の認識の微妙な差異を確認するために、当事者による座談会から引いてみよう。

**平野**（略）——いよいよ戦争になつて、まだ昭和十二年、十三年あたりは「文学界」など見ましても、そんなに戦争の影響はないわけですけれども、昭和十五年に大政翼賛会ができて、岸田さんが初代の文化部長として入つてゆく。あのときの雰囲気からいいますと、何となく全文壇を挙げて、岸田さんをあそこへ送りこむことによつて戦争の直接の圧迫をやわらげたいという気があつたのじやないですか。

**河上** やわらげたいといつてもいいし、あるいは、あえて危険を冒していえば、協力した、文壇的にね。

**平野** そういうふうにいつてしまうと誤解があるのだけれど、本質的に文学の精神を貫くことは結果からいつて一番いい意味で協力することになる。便乗的に協力することではないけれども、本質的に協力することになるので、岸田さんを入れたほうがいいということになつたのじやないですか。つまり近衛新体制というものについてのいろいろ買いかぶりもあつたと思う。あのときに軍部を一応押えて近衛新体制のもとに文化国家を建設するというようなところがあつて、そのために岸田さんなどが入つたときには「文学界」などもわりに積極的に応援したのじやないですか。

**河上** 個人的にはそうですが、雑誌としてはそういうことはいえないのじやないか。

**舟橋** ほんなんか「文学界」へ入つたときは安らぎを感じて、たいへんありがたいことで楽しかつたのですが、その後

戦況が悪くなつて、統制に服さなければならぬような情勢になつてきてからは、ぼくは鬱々として個人的には癪にさわつてたまらない状態になつてきた。ぼくは岸田さんのすぐ後ろから二重橋に行きましたよ。岸田さんの背中を眺めながら歩きましたけれども、心中は鬱々たる不満とやるせなさ絶望感とに虐げられながら歩いてた。

また、昭和一五年九月下旬のこととして高見順が記したところによれば、文藝春秋社の編集者からの伝言で、河上徹太郎が会いたいというので応じると、文藝春秋社の社員五名にくわえ、横光利一、武田麟太郎、島木健作など『文学界』系を中心に、作家評論家が一〇人ほどが集まつていたという。そこで河上徹太郎が、『今度できる「新体制」組織の文化部門の重要な地位に、民間から岸田國士が起用されることになるらしい』、『われわれとしては、ぜひこの岸田國士を支持したいと思ふ。その支持といふことは、文化統制の防波堤になつて貰はうといふことである』と発言したのでとい<sup>8</sup>う。この高見の記憶に疑義を呈しながら、岸田擁立に関わつたとされる中島健蔵は、次のように回想している。

これ〔大政翼賛会〕を作つた経過の中には、やはり、軍部に對抗する力の結集という意図が、暗黙のうちに存在した。いよいよ大政翼賛会が結成されるといふ前になつて、突然、三木〔清〕さんと呼ばひ出されて文化部長にだれを推すかについて相談を受けた。〔略〕三木さんは、どうしてもバリケードが必要だといつた。翼賛会全体はともかく、文化部はよほどしつかりした人物にたのまなければならぬといつた。そして、実は岸田君の名を出して推せんしたのだが、どう思う

か、と聞かれた時、わたくしも、ほかには人がいないと思うと答えてしまつたのである。<sup>9</sup>

一連の回想の検討は先行研究に譲るが、ここで確認しておきたいのは、岸田擁立に陰に陽に関わつた人々の、岸田に対する後ろめたさ、あるいは文章全体に漂う重苦しい雰囲気である。

こうした様相を確認した上で、本稿では、当時の文学場において岸田國士がどのような人物と目されていたのかを検証した後に、岸田の大政翼賛会文化部長就任が当時どのように言表されていたのか、その言説（の修辭）に注目した分析を試みたい。

## II

昭和一五年秋、初代大政翼賛会文化部長の候補として一挙に時の人となつた岸田國士だが、それに先立つ時期、岸田とはどのような文学者・人物と目されていたのだろうか。

文学者としての経歴は、「古い玩具」〔演劇新潮〕大13・3〕による劇作家としての出発にまで遡るが、昭和初年代以降は、新聞連載を中心とする長編通俗小説の書き手として、文学愛好者にとどまらない読者にその名を知られていつた。<sup>10</sup>また、昭和一〇年には、久々となる戯曲「澤氏の二人娘」〔中央公論〕昭10・1〕と「歳月」〔改造〕昭10・4〕を発表し、高い評価を得ていた。さらに、翌年には、問題作「風俗時評」〔中央公論〕昭11・3〕を発表し、物議をかもしながらも、旧左翼の厚い支持を得てもいつた。記者「作家歴訪（2）憂国精神を語る岸田國士氏」〔日本学藝新聞〕昭11・4・1〕は、ひとえに「風俗時評」ゆえに書かれ

たものといつてよいし、そのことは《最近諷刺文学が叫ばれながら一向それを裏書する作品があらはれないとき、あなたの『風俗時評』は、一つの道をひらいたものと思ひますが……》(一面)という質問の口火にも明らかである。

ここで、こうした時期——つまりは、日中戦争開戦以前というタイミングで発表された人物論・白太郎「人物素描 岸田國士」(『文藝』昭12・4)を参照しておこう。《岸田國士の文壇的地位》を検討していく同文においては、『客分』といふ言葉によつて説明するのが、一番便利でもあり、妥当でもある(126頁)というのが問題提起でもあり結論でもある。これは、さまざまな世界において、岸田は本来対立する二つの陣営双方の《客分》としての地位を占めているのではないか、という見立てである。次に引くのは、小説家としての岸田に関する説明である。

まづ彼が純文芸作家であることについては、誰も疑ひをさしはさむものはあるまい。それどころか彼は、純文芸の中でもかなり高い地位を与へられ、相当の尊敬を集めてゐる。では、彼は純然たる純文芸作家であるかといふに、彼の通俗作家としての半面を知つてゐるものは、それに同意するのを、躊躇するだらう。そこで結局彼は、「純文芸の客分」といふことに落ちつくわけだ。／＼同様に彼は「通俗文学の客分」でもある。(127頁)

《更に劇壇における岸田の地位も、何となく客分的》で、『思想的にいつても、彼はいはゆる「進歩的」な側に属する、少くともその方のシンパの一人》であると同時に《『文芸懇話会』の指導的なメンバーの一人》(127頁)であり、やはり双方からみて「客

分」なのだという。以上を総合して、岸田は特異な地位を確保しているというのが白太郎の指摘であり、次の結論が示される。

(「岸田は」) いづれの側からみても、「客分」である。(略) 二つの間にかその地位は高くなつて、今では純文芸と通俗の両方で「中堅」級の最高に位し、「大家」に踵を接してゐる。(127頁)

こうした特異かつ重要な地位を得た岸田は、日中戦争の開戦に伴い、文藝春秋社の特派員として二度、北支へ渡り、報告文学を書きついで。こうした展開以後の岸田像として、無署名「人物クローズ・アップ 岸田國士」(『新潮』昭13・6)が書かれる。

そこでの岸田像は、同文の冒頭に《岸田國士は今日では一種の社会的名士になつてしまつた》と端的に示される。同文に即して具体的に列挙すれば、『山本有三のあとを受けて明治大学の文芸科長の職にあつて、その仕事もなかなか凡帳面にやつてゐるらしい』ことがあげられ、『劇壇における位置、通俗長篇小説における位置は随分大きくつて、どことなく身についてゐる生活態度の厳しさまで立派にこの人を社会に押し出す役目をはたしてゐる』(124頁)と、文学者としてのポジションにも論及される。そこから、「チロルの秋」以来の演劇関係の経歴が振り返られつつ、『人物は極く律気で紳士的であるから、たいていの人間は、この人は氣弱いインテリゲンチヤだぐらゐに思つてゐたかも知れない』という文字通りの人物像にくわえ、『土官学校を終へて中尉か大尉かまだ軍籍にあつたのだが、上官と喧嘩し、面罵したあげく軍籍を去つたといふだけでも相当のものと言はなければならぬ』(124頁)と、かつて軍人であつたことが特筆される。その後、

東京帝大選科で仏文学を学び、渡仏し《ジャック・コポオか誰かの近代劇の正統を深く学びとつた》という《ねばりつ気の強》さから、《品格が崩れてゐるわけでもなく、下世話に砕けたやうな俗人ぶりもないあたりは決して普通の日本人ではない》(125頁)とその性格(特異性)までが顕揚される。また、新聞小説についても《持つて生まれた潔癖さのために、ぱつとした俗受けはしないやうであるが、下手に子守娘を喜ばせるやうな下卑た処がなく、また構成に巧みであるといふ劇作の経験がものを言つて、いい舞台が与へられても、舞台負けすることのないのは流石》(125、126頁)だと、性格と演劇的経歴が加味されつつ高く評価される。それらが、次の一節へと流れこんでいく。

今では劇作家としてよりも、新聞小説家として、また社会的名士として、同時に文壇に出て来た新感覚派の仲間よりも重々しい位置を持つてゐる。だがそれとともに、これまで表面に出なかつた軍人型が表に現はれて来たことは気にかかるとも。先頃文藝春秋社の特派員として北支に行つた時の紀行文に、かつての同期生が今では枢要な位置を持つ部隊長になつてゐるのを一々訪ね、ちゃんと軍人らしい意見の交換をしてゐる。

ここで強調された陸軍という出自も含め、同文で列挙された経歴を包括して、岸田が《同時に文壇に出て来た新感覚派の仲間よりも重々しい位置》(126頁)にあったことは確認しておきたい。

その後、「一国民としての希望」(『改造』昭15・9)を発表していた岸田は、同文が一つの契機ともなつて、新聞紙上で文化部長候補者としてさまざまな憶測の渦中に巻きこまれていく。文化

部長就任報道以前に、「適任の文化部長」岸田國士氏を語る山本有三氏(『読売新聞』昭15・10・15)という記事が出て、そこでは次のような山本有三のコメントが引用されていた。

「岸田君の文化部長、い、ねえ、非常にい、適任者中の適任者だ、事変以来何度か国境の土を踏んで来てゐることも強味だし、それに単に戦地を見て来たといふだけの人ぢやない、立派に対策を組立て、日本の明日は斯くあるべしと、ちゃんとした抱負もあれば熱意もある、それに岸田君の中に軍人の血の流れてゐることも非常にい、ことだと思ふ」

以後も岸田の文化部長就任関連言説で反復されていく《適任》という鍵語を用いながら、従軍体験やそれをふまえた文化論、さらには岸田の父親が陸軍出身であることにまで論及する山本のコメントは、次のようにして具体的な作品に言及してもいく。

「岸田君が文化政策の指導者としての適、不適は、最近のあの人の書いたものを見れば一番はつきりしますよ、例へば『従軍五十日』私は熟慮してわざ／＼買つて近衛さんにお読みなさいといつて送つてやつた、ご苦労な仕事だが、選ばれたからは存分に腕を揮つてもらひたい、何から始めてくれな」と注文をつける必要はない、彼ならば安心して任せられる」(7面)

岸田の『従軍五十日』(創元社、昭14)にふれつつ、山本はそこに新体制運動の旗手「近衛文麿の名前を滑りこませることで、近衛・山本による岸田支持が新聞紙上で公にされていく。その翌日、「チラリと抱負 部長候補の岸田氏」(『朝日新聞』昭15・10・16)という記事では、次に引く岸田のコメントが紹介される。

新体制については新聞でいろいろ承知して来ましたが、之は是非しつかり進んで貰はねば……と個人として考へてゐたのですが——しかし文化部長といふことはまだ全然僕に話が無いのです〔〽〕あつたら本当に真剣に考へて見ませう、僕自身何等かの形で協力したい意思は大いにあるのですが文化部長として適任かどうかはもつと考へて見たい（7面）

ここでは、候補とされた岸田自身も《適任》という鍵語を用いているが、本稿で注目したいのは、言説上で反復されていく《適任》の内実である。というのも、文化部長の具体的な業務内容はこの段階で報じられていないし、当事者にも不明だったからである。岸田のもと、大政翼賛会文化副部長を務めた上泉秀信は、『文化の様相』（大日本出版、昭17）で次のように述べている。

大政翼賛会が誕生し、その中に文化部が設けられた時、文化部長に岸田國士氏が交渉を受けた。その時、岸田氏は一体文化部では何をしたらよいのかと質問されたが、翼賛会の幹部の方向の回答は、それは担当者に依つて定まるだらうといふことだったのである。従つて大政翼賛会の中に文化部が設けられても、何をやつたらよいかといふことについては、その時まだ翼賛会の最高幹部にもはつきりしてをらなかつたのではないかと思はれる。（40～41頁）

してみれば、岸田の文化部長就任をめぐつて言表されていった《適任》という鍵語は、全くを以て具体的なレベルの議論ではなく、権力による文化統制に適切な仕方での対処で、きそ、うな人物（像）岸田國士に対する、漠然とした、しかし賭けにも似た大きな期待が含意された、実に意義深い支持表明でもあつたのだ。

実際、岸田の大政翼賛会文化部長就任が報じられ、「世界的文化の母胎 大政翼賛会文化部長に就任して」（『朝日新聞』昭15・10・20、5面）という岸田による理念的なマニフェストが示された後にも、岸田という人選・人物に関しては好意的な支持が言表されていく。《大政翼賛会はその文化部長を文壇から簡抜した、流石は後藤龍之助の眼力だとの評判は文壇にも出てゐる》と、その人事を評価する「異彩を放つ両部長 岸田國士氏と武内文彬氏」（『朝日新聞』昭15・10・20）には、次の一節がみられる。

正直にいつて今の文壇から大政翼賛会に人を送るとすればその人物識見において岸田國士氏を措いて他に適任者は無い。／＼芯は中々頑固だが、温厚篤実な紳士で、それにこの愛国文学者には視野の狭くない点が、「従軍五十日」のやうな傑作を生んだ所以でもあり、且つ又その言説が一般から信頼される理由でもあらう。（1面）

ここでも岸田が《適任者》とされ、人柄と「従軍五十日」がその根拠とされていく。次に引く、『異彩』という修辭を用いた「新政治へ突進」——大政翼賛会に異彩を放つ——（『国民新聞』昭15・10・20）も、岸田の文化部長就任関連記事である。

岸田國士氏が大政翼賛会の文化部長になつた、そして新しい日本文化のため裸一貫で大いに乗り出すといふニュースに文壇は勿論のこと、全日本の知識階級は大喜びだ〔〽〕岸田氏は処女作「紙風船」から従来の日本戯曲に新しい息吹きを取り入れ、また香り高い小説を種々発表して画期的な功績を残し、新体制陣營のなかでも最も異彩を放つ存在、それだけに一億国民が岸田さんに掛ける期待も大きいのだ（7面）

岸田の経歴を振り返りながらも、その清新さが《異彩》という修辭へと好意的に結びつけられていく。《大政翼賛会の文化部長に誰が坐るかはその職責からみて大いに注目されてゐたのだが、岸田國士がこの大役を引受けたといふ報知を聴いて結構なことだといはれてゐる》と報じた上で、《では岸田國士とはどんな人か》と、人物へと興味を喚起していく無署名「岸田國士といふ人」(『国民新聞』昭15・10・21)では、《文芸家としては、小説に戯曲に多くの作品を発表して来たし、フランス演劇の翻訳も行つてゐる。特に我国演劇の向上指導に尽力もしてゐる》と紹介された上で、《良識に生きてゐる本当の意味での文化人》(4面)だと、文化部長職にふさわしい高い評価が示されていく。《大政翼賛会の文化部長に納まる岸田國士氏は大いにその手腕を期待されてゐる》という無署名「文化部長に納る岸田國士氏」(『国民新聞』昭15・10・22夕)では、次のようにその経歴が報じられていく。

文壇にデビューしたのは関東震災後戯曲「古い玩具」を初代「演劇新潮」に発表してからで、同氏を紹介したのは同誌の編集長山本有三氏だつた。演劇新潮の功績は作家岸田國士を生んだ点にある、と久保田万太郎氏は後年述懐した。程岸田氏は数々の名戯曲を発表し、劇作家としての確固不動の地位を築いた、近年は小説に転じ「暖流」「泉」等の名作を発表してゐるが、支那事変勃發後北支、中支の従軍記はさすが軍人出身だけにその犀利な觀察と建設的意欲が読書界をアツピールしてゐる。

その上で、《文化部長の椅子は三面六臂の手腕を要する》と具體的な職務に言及しながらも、演劇・大学に関する実務経験が示

されることで、《広い意味で最も現の良識を持ち、感覺的に鋭い文化人であるから、蓋し適任者だらう》と、ここでも評価はきわめて高い。最後に、《尚ほ同氏は本年五十一歳、名古屋陸軍地方幼年学校、陸軍士官学校を終へ、少尉に任官後病氣のため退職、東京帝大仏文科に学び渡仏後苦難の道を歩いて来たことは有名である》(3面)と付言されるのは、その点もまた岸田を《適任者》と判じる条件であることを、問はず語りに示している。

署名記事では、船山信一が「文化時評」【2】「職能の原理」(『東京日日新聞』昭15・10・29)を書いて《大政翼賛会の文化部長には岸田國士氏が簡拔された》ことにふれ、次のように論評している。

純粹の、しかも現在第一級にある岸田氏のやうな人が文化界の指導者になるといふことは、文化人に頗る好感を与へ、大政翼賛運動を、一層明るいものとした。(5面)

ここでも、岸田の能力・魅力が好意的に迎えられ、その登用が大政翼賛会運動を《明るくする効果さえもつたと報じられている。匿名記事・薔薇人「旋回塔 岸田文化部長の就任」(『信濃毎日新聞』昭15・10・30)には、次のような言表がみられる。

□大政翼賛会の文化部長に岸田國士が就任したことは、何かしら新鮮な微風を文化人のあひだにもたらしたといふ意味で解釈するだけでは不十分であつてもつとく深い意味を汲みとることが出来なければ、文化人としての資格を欠くと同時に、翼賛運動の本質に対して熱意を欠くと云ふ非難を受けねばならない。(4面)

岸田の文化部長就任を《明るい》の変奏とみられる(『新鮮な

微風」という修辞で言祝ぎながら、文化人がそこに《深い意味》を読みとり、積極的に支持すべきことが強く要請されている。

このように、岸田の文化部長就任が報じられて間もない新聞紙上では、その人選が高く評価され、《適任(者)》である岸田の経歴が好意的に参照・紹介されていた。その帰結として、広範な文化に深い理解を示し得る実作者、しかも、人格も実務能力も優れているという、岸田國士像が再編成されていくのだ。

それゆえといってよいのだろう、「新文化運動 岸田文化部長への期待」〔東京日日新聞〕昭15・10・20、5面〕においては、各界の文化人から文化部長＝岸田への期待が示されていく。《言論統制が常識になつてゐるとき作家から文化部長を出したことは喜ばしい》と人選とその出自を評価する小説家の尾崎士郎は、《岸田氏は偏頗な考への少い人だから、正しく高い立場に立てることが期待される》としながらも、《執行力の弱い感じがあるので、異常の決意をもつて就任されることを希望する》と付言した。さらに《文学の再建》に関して、《まづ国民文学の要望があるが、これには多くの角度があり、そのうちのどの角度でやつて行かうとするかを明確にしてみらひたい》と具体的な要望を示している。同じく小説家の窪川稲子は、《まづ岸田さんにお願ひしたいこと》として、《作家乃至文化人の健康性を識別されるに当つて、その外発的な、または便乗的な言説からでなく、その仕事の実際について本質を正しく見きはめていたゞきたい》と前提した上で、《婦人の文化を正しく引き上げるための社会的施設を立派に完備していたゞきたい》と、女性作家の立場から要望を示している。《文壇、劇界などは、一国の文化から見ればまことに局部的

なもの》だと指摘する吉川英治は、次のようにして《数多くの注文と期待》——《都市文化と農村文化の懸隔、混乱の問題、進んでは支那と日本との文化的握手の問題、更に進んでは東亜共榮圏の文化的結合、また日独伊三国との文化的結合を如何にするか》を例示して、《岸田君が単なる局部的な文化問題に捉はれることなく、十年後、二十年後、更に何十、何百年後の日本文化の大局的立場に立つて、明朗闊達にして豪壯な文化へと、民族發展の姿を導いて貰ひたい》と言表し、国家的スケール、中長期的なスパンから、大政翼賛会文化部の方向性に重なるようにして持論を展開していった。

他にも、俳人の富安風生は、《岸田氏が文学者としてのみならず、広い文化面に深い理解と情熱を持つてゐられる点大賛成》《俳句を通しての国家奉公は俳壇人の義務でもあり、岸田氏はこれに十分な理解ある人と信じて欣快に耐へません》と、人事・人物を評価している。《文化部の仕事は非常に広汎であり、重大》だと捉える帝国劇場社長の秦豊吉は、《如何に国家が興隆しても文化が伴はない国は永遠の繁栄は望まれない、それだけに同君の責任は重い》としつつも、《しかし同君は我々の意見をも聞いてくれるだけの叡智と抱擁力を持つてゐる筈》だと、岸田の懐の深さに期待を寄せている。音楽評論家の堀内敬三は《芸術的気品の高い作品から、氏がすぐれた芸術家であり、刻苦精進する人であり、道義的に正しい人であることを私達は感じる》と高く評価した上で、《すべての点から尊敬に値するこの人が、芸術文化を通じて新しい皇国民を指導し、共に努力し、共に建設する立場に置かれたことはわれら楽壇人としても最も喜ばしい》、《氏の指導に期待

すると共にあらゆる協力をした」と支持を表明している。

以上を総じて、文化部長就任が報じられた直後から、岸田を《適任》とする言表が反復され、経歴として紹介されていく士官学校という出自、フランス文学修行、すぐれた劇作・長編小説、実務手腕、従軍体験、そしてそれらの体験の上になつた寛大で聡明な文化人としての評価が陸統と示されていった。裏返せば、《適任》である根拠を示すために、岸田の経歴は参照・拡声されゆき、大政翼賛会の《異彩》の人事によつて拔擢された《異彩》の文学者として、大政翼賛会文化部長岸田國士が言説上に成立していく。

### III

岸田國士の文化部長就任をめぐる好意的な言説の延長線上で、一月づけの新聞紙上、雑誌一二月号でも、前節同様の言表が、しかし情報や評価の追加などの変奏を伴つて展開されていく。

中でも注目したいのが、若い頃から岸田を知る評論家の古谷綱武が、《戦時下の中国上海における日本文学の動向を考察する上で多くのテーマやヒントを与えてくれる基礎的かつ重要な資料》だとされる『大陸新報』に寄稿した記事である。大政翼賛会人事の中でも、文化部長としての《岸田國士の登場》が、《新しい印象を与へる》という実感から書き起こす「大政翼賛会の岸田文化部長（一）」（『大陸新報』昭15・11・5）の古谷綱武は、その理由を、《文壇から大政翼賛会へ選び出された最初のひとであるといふこと》と《日本の政治のために芸術家といふものが選ばれて政治家になつたといふこと》の二つにみている。とりわけ後者を

重視する古谷は、《日本では長い間、芸術家》に関する《時の政治や社会に関心をもちたいことをもつて誇りとしてゐた、根強い伝統がある》ことを指摘した上で、《かういふ状態のなかで、岸田國士の登場といふものは、ひとつの大きな文化的な意味をもつてゐる》（4面）と位置づけている。つづく「大政翼賛会の岸田文化部長（二）」（『大陸新報』昭15・11・6）で古谷は、岸田の文化部長就任について、《この一両日の諸新聞にあらはれた文壇人たちの批判をみると、一応表面的には好評のやう》だとみただ上、次のようにして読者（層）の興味を喚起していく。

最近、岸田國士の名前を、いちばん、ひとびとにつよく印象づけたのは、東西の朝日新聞に連載されて、更に映画になつた「暖流」であらう、あの「暖流」の作者である岸田國士とは、どんな経歴のひとか。彼は、一般の文壇人とは多少違つた経歴の持ち主で、又文壇へ登場したのも、可成り年をとつてからである。

ここにすでに、岸田の文化部長就任をめぐる《適任》・《異彩》という修辭を配置しながらその経歴をたどるという、前節で確認した言説の文法が踏襲されていることは明らかだが、古谷の一文はその文壇登場期以前の情報に関して、詳細をきわめる。

岸田國士は、明治二十三年、東京の生れである。父は、日露戦争に、野戦砲兵第三連隊大隊長として出征したひとで、彼は軍人の子供として、幼年学校に入学した。そして士官学校に進み、少尉に任官して、久留米連隊に入隊、日独開戦にあつては、補充勤務を命ぜられ、本隊凱旋とともに、病氣のために軍職を去つたといふ経歴の持ち主である。／軍人と

しての将来を全く捨て、からは、フランス文学の研究を志して、帝国大学仏文科選科に入学そして文学及び演劇研究のために渡仏を決意、台湾、香港、印度支那を転々として、フランスに渡つた〔 〕あちらでは、生活の資を得るために、講話条約実施委員会、埃伊国境画定委員会、国際連盟陸軍事務局などと職を得てゐたことも、今日から考へると興味あることである。

最新の年譜にも匹敵する右の経歴情報がメディア上で開示され、その後の具体的な人間関係にまで古谷の筆は及んでいく。

フランスへ渡つたのは、大正八年であるが大正十二年に帰朝、翌年、豊島與志雄の紹介にて山本有三編輯の「演劇新潮」に「古い玩具」を発表したが、文壇へのデビューであつて大政翼賛会の重要なスタッフである後藤隆之助らと相前後して、第一高等学校にあつた山本有三との間に、岸田國士が密接な関係をもつやうになつたきっかけは、このときにできたのである。

つづく劇作家・岸田の登場については、深田久彌の評言を援用しながら、『古めかしい日本風の世界に、非常に新鮮なフランス風なハイカラさをもつて登場した』（4面）とまとめている。

このようにして、外地の新聞ではあるが、大政翼賛会文化部長就任を契機に、文学者として登場する以前／以後について岸田の経歴が明らかにされ、それは《適任》たる根拠ともされた。最終回「大政翼賛会の岸田文化部長（三三）（『大陸新報』昭15・11・7）で、『文壇に登場してから岸田國士は文壇的には、順調に認められて、仕事も、立派な仕事を、次々に発表してゐる』と概括

する古谷は、さらに岸田の別の経歴についても筆をさいていく。

昭和七年、明治大学に文芸科が開設されたこと「演劇新潮」以来親交のある科長山本有三に招かれて、創作指導を担当、山本有三が去るに及んで科長となり、学校行政の上では、すでに試験ずみの手腕をもつてゐるわけである。

このように、岸田の多面的な経歴を紹介した上で古谷は、『諸君が、文士といふ言葉をきくと、すぐ思ひだすタイプとは、かなり違つたひと』として、岸田像を《異彩》という範疇に配置していく。最後に古谷は、『芸術家として、彼が自分を、いかに考へてゐるか』について、『新日本文学全集第三巻・岸田國士集』あとがき（改造社、昭15）を引用・紹介する。そこには、自作解題に先立ち、「人間に於ては心理を、社会に於ては風俗を、私の眼は常に追ふ。生活はその雰囲氣に、思想はその在りやうに、私の興味はおほかたつながる。現実への懷疑と、理想への信頼とは、私のうちにあつて、決して矛盾はしないのである」（491頁）といった岸田國士による一節が読まれもする。《以上の文章で、岸田國士の姿をひとびとは、だいたい察することができるであらう》と総括する古谷は、岸田を《大人》の一句で要約し、文化部長職についても《決して行きすぎをしないといふことが、彼の仕事の特徴になるのではなからうか》（4面）と予示している。

岸田の文化部長就任をうけて書かれた、インタビュー記事「若き指導者に聴く 岸田國士氏／政治に文化性を」（『帝国大学新聞』昭15・11・11）で、岸田は次のように紹介されている。

瀟洒な劇作家、精緻な長編小説作家——ハイカラな作風と、そのくせ強靱な野性のモラルを誇る小説家岸田國士氏が「新

体制”の掛声とともにボンと跳ね上つて文化陣営の統帥格におさまりこんだ、大政翼賛会文化部長——日本文化を生かすも殺すもこの人の腕一つだ、激動する転換期を迎へてともすれば陰鬱な表情をとり勝ちな日本文化に新時代の“暖流”を吹き込むことこそ岸田さんの今後の大きな仕事であらう（一面）

これは、岸田の経歴を紹介しながら、それを《適任》たる根拠としてさりげなく示しつつ、直近の長編小説『暖流』（改造社、昭13）を流用した修辭によつて支持・期待を示す言表となつてゐる。また、はやくも文化政策への議論を展開する、中野好夫「芸（上）文化政策へ望む」（『朝日新聞』昭15・11・14）でも、文化部長職については《幸ひに岸田氏の如き適任者が迎へられた》（5面）ことが言祝がれてゐる。やはり文化を論じる、窪川鶴次郎「文化と政策 文化政策への期待（一）」（『都新聞』昭15・11・17）においては、次のような期待が言明されている。

大政翼賛会の成立と同時に、同会に文化部が設けられることになり、更にその部長に岸田國士氏が就任することになつて以来、今後の文化或は文化政策に対する関心が急激に昂まつて来た。これは勿論、大政翼賛会の運動に対する人人の大きな期待の現れであらうが、そこには、部長としての岸田氏が作家であるといふこと、その活動経歴とに対する人々の期待が織りこまれてゐるに違ひない。（一面）

こうして岸田の経歴・能力に、役職・仕事が接合されるようにして、《適任》という鍵語を用いた期待が言表されていく。

もちろん、著名な文学者からも明るい期待は示されていく。岸

田の文化部長就任を《翼賛会人事のヒット》と評す「話の屑籠」（『文藝春秋』昭15・12）の菊池寛は、次のように述べてゐる。

岸田君が文化部長の最適任であることは、文壇、劇壇、映画界などに関する限り、何人も異議はないと思はれるのである。岸田部長を迎へた途端、人々は希望と光明を感じたことは確かであり、岸田君に協力して文化方面に於ける大政翼賛に邁進する事を、心々に誓つたであらうと思はれる。（303頁）

また、同じく総合雑誌誌上では、高村光太郎が「適材 岸田氏に寄す」（『中央公論』昭15・12）で次のように言表してゐる。

大政翼賛会の文化部長に岸田國士さんが出られたことは誰にきいても大変明るい感じをうけたやうで、近頃めづらしいほど公明な、むしろ意外なほど理解のある人事であつたといへる。（124頁）

こうして、岸田の文化部長就任は文学関係者に明るい印象をもたらし、少なくとも言説上では協力体制が整えられていく。《大政翼賛会の文化部長に岸田國士君が就任された。爰に慶祝の意を表し、御発奮を希ふ》という無署名「文化往来」（『政界往来』昭15・12）では、《望むところは、昭和維新、大東亜新秩序の建設、延いては世界維新の推進力の一翼たるべきわが国文化の担当者、決死の覚悟で奉公の誠を致すべきだ》（150頁）と、時局に應じた期待が言表される。同誌上には、岸田の起用を《「異彩」・《適任》と評した人物紹介、次に引く山川十三「時の顔・噂の人 岸田國士」（『政界往来』昭15・12）も掲載されている。

岸田は清鮮繊細な詩人肌の人間だが、同時にまた、中々堅いシンを持つて居り、更に、ものを大所高所から視得る資質

を持つてゐるやうだ。兎角文壇の中には、文壇的な殻の中に立てこもつて物を見たり、云つたり、近視眼的な物の考へ方をする弊があるやうだ。偏してはならない筈の文学者が、兎角偏し勝ちな傾向の尠くなかつたことは事実だ。その点について岸田は文壇でも異色ある存在だ。

さらに、『小説家であると共に、戯曲家でもあり、また演出家』でもあり、『彼の戯曲によつて、わが国の新劇に一生面を画したことは事実』だと、文学者としての経歴を称揚した上で、『演出もフランスの世界的演出家ジャック・コポオに学んだだけに、独特の境地が観取される』、『演劇の演出から、国民総動員による文化的演出を買つて出た彼、果してどんな演出ぶりを見せるか、これこそ真の観物』(184頁) だとして、期待が示された。

もとより、文芸雑誌をみても、無署名「文壇余録」(『新潮』昭15・12)において、次のような言表がみられる。

岸田國士氏が、大政翼賛会の文化部長に就任した。文化部といふものが、どの範囲で、どういふ仕事をしてゆくのか、今のところはハッキリ分らない。が、その部長に岸田氏を置いたことは、最も適任であると思ふ。前評判も概していいやうだ。(略)岸田氏ならどの方面の文化部門でも、相当に期待していいと思ふし、また、その見識には信頼出来る。(53頁)

ここでも、具体的な業務が不明な中で、しかし岸田が『最も適任』とされながら、その人物・能力は保証されていく。同誌では無署名「新潮評論」(『新潮』昭15・12)にも岸田への言及が見られ、就任報道以来の岸田が、『しきりに国民生活の合理化や文化

性の向上を説いてゐる』ことによつて、『大賛成』、『大政翼賛会の文化部長として、あくまでその抱負を貫いて欲しい』(8頁) といったかたちで岸田支持を言表し、エールを送つてゐる。

もつとも、『幸にして文化部には岸田氏、經濟部には本位田氏、東亜部には亀井氏のごとき、いづれも識見人格ともに卓越した人物をえてゐるが、そのいづれにしても数ある人材、或は数ある専門家中の一人であつて、国民中の知識がこれによつて網羅されたとも、野に遺賢なしともいへない』(7頁) という無署名「社説 大政翼賛会に与ふ」(『公論』昭16・1) のように、冷ややかな言表もないわけではなかつたが、それでも一定以上の岸田支持は確認できる。文芸雑誌に戻れば、岸田國士・河上徹太郎「大いなる構想」(『文藝』昭15・12)において、岸田がこれまでに書いた通俗長編小説の内容にふみこんだ、次の発言もみられる。

河上 あなたが、かういふ職におつきになつて、僕の期待する所は、あなたの旧作『由利旗江』とか、『双面神』の千種、あの二人の女性ですね。あ、いふものに盛らうとした良識ですね。かういふものをもつと今度本当に実践的に世の中に浸み込ませて欲しいですな。あの作品の成功、不成功は別として、あの中には跛行してゐる日本の社会生活、家庭生活を常態にしようといふ意欲が感じられるのです。(22～23頁)

以上、本稿Ⅱ・Ⅲにおける検証・分析をまとめておくならば、大政翼賛会文化部長への岸田國士の就任については、タイムラグをおかずに、大勢において支持・期待が言表されていった。中でも特徴的だったのは、その職掌が不分明であるにもかかわらず、岸田が『適任』だと繰り返し言明され、その根拠として、いわゆ

る文学者とは差異化される《異彩》と称すべき人物だとされ、人物紹介を兼ねた経歴紹介（多彩な人生経験・文学的遍歴、文学者・実務家としての卓越した能力）が、次々と言説化されていったことである。こうして、瞬く間に、言説上において岸田支持のシフトが形成され、そこに期待や要望も加味されていったのだ。

#### IV

その後の大政翼賛会文化部長としての岸田國士の仕事（の検討）については、本稿の域をこえるが、文化統制に対するバリケードというよりは地方文化運動に力が注がれていったようにみえる。文学場をめぐる現実的な制約の中、思うような成果が出せないながらも、一度めの改組の際には再任となり、文化部長を昭和一七年七月まで務め、その職は高橋健二へと引きつがれていった。本稿のまとめ、展望をかねて、岸田の文化部長辞任のタイミングで掲出された無署名「文芸手帖」（『文藝』昭17・8）を参照し、同時代に言表されたもう一つの視座を提示しておきたい。

同記事は、岸田國士の文化部長就任時（の言説）を次のように振り返るところから書き起こされている。

新聞も雑誌も競つて新文化部長の意見をもとめた。文壇人は新文化部長に対する希望を並べた。今、古い新聞を引っ張り出してそれらの希望の言葉を読むと、吹き出さずにはゐられない。実に甘ちよるい政治的無知と虫のよい自己中心主義が臆面もなく表明されてゐるのである。（略）一身を顧みぬ作家らしい理想主義は余り見あたらない。（140頁）

礼賛ともみえた岸田の文化部長就任を言祝ぐ言説は、右のように相対化されているが、こうした視座によって、昭和一〇年代後半の時局展開（の速度）がうかがわれると同時に、岸田國士の文化部長就任については、①戦後に回想される、擁立した人々による後ろめたい後悔、②就任直後に言表された、明るい期待、③退任時に表明された、牧歌的にすぎた就任時の浮かれ具合、と時差を伴った複数の視座を析出することができる。これは、大政翼賛会文化部長というポストの多面的な見え方・評価とも連動したものであるし、今日における評価の難しさにも直結している。「文芸手帖」に戻れば、つづいて次のような言表がみられる。

今から振り返つて見るとはつきりわかるのだが、岸田國士氏の意見と抱負は当時の政治的気温の上昇によつて急激に醜酔した処士横議とは無縁のものであつたやうだ。彼がそれまで文学者として作品のなかに表現してきたその理想を、文化部長としても繰り返し表明してゐるに過ぎない。逆説的に言へば、当時政治から最も厳格に距離を保つてゐたのは、作家商売を「転業」して政治のなかに飛びこんで行つた岸田國士氏その人であつたかも知れない。（140～141頁）

そうであれば、今後の課題は、大政翼賛会文化部長としての岸田の言動、そして文化部長職の前／後に書かれた一連の通俗長編小説と戯曲「かへらじと」（『中央公論』昭18・6）についての検討である。こうした作業は、昭和一〇年代における文学場の諸問題を浮き彫りにしつつ、現実世界における文化の意義・役割、文化統制等の影響を考えることにもつながるはずである。

注

- (1) これを《日本ファシズムが体制として成立したことを示す》(270頁)と評す、木坂順一郎「大政翼賛会の成立」(岩波講座「日本歴史20近代7」岩波書店、昭51)のような見方もある。
- (2) 豊島與志雄「岸田國士君を偲ぶ」(『中央公論』昭29・4、218頁)。
- (3) 安田武「大政翼賛会文化部長のイース——岸田國士論——」(同「定本 戦争文学論」第三文明社、昭52)、67、68頁。
- (4) 都築久義「日本文学報国会への道——戦時下の文学運動——」(『愛知淑徳大学論集』昭63・2)、99頁。
- (5) 渡邊一民「岸田國士論」(岩波書店、昭57)、188、189頁。
- (6) 奥出健「大政翼賛会と文壇——岸田國士の翼賛会文化部長就任をめぐる——」(『国文学研究資料館紀要』昭56・3)、55頁。
- (7) 河上徹太郎・舟橋聖一・平野謙「昭和十年代の文学」(『群像』昭40・3)、22頁。
- (8) 高見順「昭和文学盛衰史」(文芸春秋社、昭33/引用は「高見順全集 第十五卷」勁草書房、昭47)、333、336頁。
- (9) 中島健蔵「岸田國士の生涯——その一断面——」(『文藝』昭29・5)、24頁。併せて、吉野限三郎「岸田さんのこと」(『文藝』昭29・5)、中島健蔵「回想の文学④兵荒馬乱の巻」(平凡社、昭52)、酒井三郎「昭和研究会 ある知識人集団の軌跡」(中央公論社、平4) 他参照。
- (10) 拙論「北支物情」・「従軍五十日」の同時代評価——岸田國士の昭和一〇年代を考えるために」(『立教大学日本文学』平27・1) 参照。
- (11) 拙論「岸田國士「風俗時評」の射程」(『文芸研究』平26・9) 参照。

(12) 注(11)に同じ。

(13) 岸田國士という人物やその文学(の特異性)を説明する際に、陸軍士官学校以来の多彩な経歴を総花的に列挙していく方は、この時期に整理されたとみてよく、青野季吉「解説」(『現代日本小説大系 第五十一巻』河出書房、昭26)などにも受けつがれていく。なお、陸軍関係の人間関係については、大笹吉雄「最後の岸田國士論」(中央公論新社、平25)に示唆的な論及がある。

(14) 大橋毅彦「邦字新聞「大陸新報」瞥見」(同「昭和文学の上 海体験」勉誠出版、平29)、422頁。

(15) 「岸田國士氏を支持す」(『日本学藝新聞』昭16・4・10)、「再出発の大政翼賛会文化部に望む」(『日本学藝新聞』昭16・5・10) 他参照。

(16) 岸田國士・高橋健二「新旧文化部長対談(1)」「(3)」(『朝日新聞』昭17・7・10)、「高田里恵子」高橋健二、闘う文化部長——第一高等学校と大政翼賛会文化部——(小岸昭ほか編「ファシズムの想像力 歴史と記憶の比較文化論的研究」人文書院、平9) 参照。

※本研究はJSPS科研費15K02243の助成を受けたものである。

(まつもと かつや 神奈川大学教授)